

2021/7/8-2

(うと Q 世話し「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」2/4)

話を江戸時代に戻しましょう。

では先にお話した江戸時代の、特に身分制度「士農工商」に焦点を当ててみましょう

江戸時代、我が国はまだ農業国だったので人口比率から申しますと階位二番目の「農」が最も多かったと推察されます。

何故「農」が階位第二位と高位だったのかと申しますと、階位第一位の「士」が「農」から年貢を納めさせるのに前向きなモチベーションを与える為、第二位という高い階位を授けた様です。是は同時に「農」の不満をそらす綬名誉褒章でもあったようです。

その「農」やその下の「工」から見て、階位最下位の「商」如きが階位二位、三位の上位階級を差し置いて「士」に取り入り暴利を貪る等もっての他である。

それには同じ「商」の中の豪商ではない「零細商」も同じ階位の同列地位者に出し抜かれた「近親憎悪」的な感情も関係して「お上と大商人」(今でいえば国や役所と超大企業)は庶民の最も忌むべき敵である」という感情の下地ができたのではないかと推測しております。つまり諸外国で理解されている「生産者と消費者は 2 チームが別々にある訳ではなく、結局は公私の捉え方に起因した同じ人間の両側面である」という認識が我が国では「お上対庶民」「強者対弱者」「悪対善」の完全二項対立軸、即ちどちらか一方純度 100%の混じりけなしの存在、換言すれば一方が 100%完全悪で一方が 100%完全善、更に換言すれば、わが国民性によくみられる純粹「一」の思考、即ち「完全一方傾斜」として相いれないものになってしまった様な気がしております。

そうして事実又「最下位から抜け出した」一部の大商人とその後継者達が、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」の「カンダタ」の如き振る舞いをし続けてしまった事もその思潮に更なる拍車をかけたのかもしれませんが。

なので、値上げ→賃上げ→賃上げ分消費→経済好循環を淀む事なく実現させる為には、前者の方々は

「カンダタの様な優越的地位を利用して弱いものを切り捨てる態度」を改め、まずは賃金を上げる

(前回のバブル崩壊時に解雇した技術者が渡海し、彼の地で安くて良い商品を生み出し、それがブーメランとなって逆輸入され、その後のデフレ時代の端緒となった経験も踏まえてです)

又、後者の末裔である我々はまず上述のワンサイド思考を止め

「経済における同一人間存在の両面性に気づき、わが身可愛さから溜め込むばかりでは、結局自身の首を絞める事になる。ここは「自他ともに救わん」と、自分の方から手を上げる勇気を持つ必要がある様に思われます。

「それじゃ誰が勇気をもってやった事の保証をするんだ？」

「それは自分です。でないといふと今迄と何も変わりませんから。100%のお膳立てや保証の取付

け完了を待っていたら、それこそ人生は終わってしまいますから」

それでも怖いなら最後に一句

「赤信号（デフレ再来）みんなで「使えば」怖くない」

（続く）